

【文芸時評】

終わりまで生きる

横尾和博

前号でも村上春樹を紹介したが、「1Q84」が爆発的な売れ行きである。この原稿を書いている段階（七月八日現在）で、1巻2巻合わせて二百万部を突破。前代未聞の発売部数だ。前作「アフターダーク」から五年、著者にとって十二作目の長篇小説である。ブームの背景として発売前に内容が公表されなかったこと、日本人作家で現在ノーベル文学賞に一番近く、今年二月のエルサレム賞受賞式でイスラエルのガザ攻撃批判のスピーチをしたことなどメディアを賑わしたことがあげられる。私自身書評を書く機会に恵まれ、東京FMで二回ほど話すチャンスがあり、「1Q84」のすばらしい出来映えを広めることができた。この本の特徴を述べると、村上の過去の長篇同様二つの話のバラレルな構成となっている。すなわちスポーツインストラクターで悪を懲らす殺人組織の殺し屋の女性青豆と、予備校教師で小説家志望の青年天吾、それぞれの視点が三人称で交互に語られていく。ときは一九八四年。物語の中心軸はカルト教団。カルトと聞けば、村上が九五年のオウム真理教による地下鉄サリン事件に敏感に反応し、ノンフィクションを書いたことを覚えている方も多いはずである。そのオウムが宗教組織として活動を開始したのが一九八四年。またジョージ・オーウェルが一九四九年に書いた近未来小説「1984」も下敷きになっている。テーマはカルトに象徴される人間にとり憑く独善的、排他的な観念。それが悪や暴力へと人を尽き動かす不可思議を解く。すでに十九世紀、ドストエフスキーが「悪霊」で提起した課題でもある。だが今回の作品は若い男女の「踏み越え」の物語であり、主題としてはむしろ「罪と罰」に近い。村上とドストエフスキーについては私が二十年前にも指摘したことである（拙著『村上春樹とドストエフスキー』）。

一九六〇年代後半の学生運動が吹き荒れた時代を体験し、その後徹底して社会とのデータツチメント（関わりなさ）を貫いてきた村上が、九五年の二つの出来事（オウムと阪神大震災）を契機としてコミットメント（関わり）へと転身した集大成が今回の作品である。村上作品の特徴は「わかりやすい文章」だが、「寓意と象徴による難解な物語」。今回も「空気さなぎ」「リトル・ピープル」「1Q84の世界」など戸惑う言葉が登場するが、彼の小説は理解することより感じるほうが大事だと思う。人間性が喪われた孤独と個人の現代にあつて、時代とコミニケーションする大切さを示している。ぜひ一読を勧めたい。

さて夏の芥川賞を受賞した磯崎憲一郎は、真面目に文学に取り組もうとする姿勢に共感を覚えた。昨今は文学以外の演劇や映画などの分野からの文学参入に光があたり、話題になっているが、磯崎は文藝賞の「肝心の子供」でも、ブツダから三代に渡る系譜を辿り生きる意味を問うている。文学ここに在り、という作品だ。

また七月九日に敬愛する評論家、平岡正明が逝った。彼は一九六〇年代後半から鋭い観察眼を持ち文学、ジャズ、歌謡曲、大道芸などあらゆる分野を批評の対象とした。批判精神を忘れずに在野で権力にはとことん組みしなかった。私も平岡のような批評家になりたいと常々願っている。享年六十八歳、合掌。

さて同人雑誌作品について私見を述べる。今回は七月中旬までに編集部に寄せられた雑

誌が対象となっている。

「九州文學」は5号（春号）と6号（夏号）を同時に読むことになった。どちらも三百頁に及び、読み応えがあり作品内容も充実している。まず5号では小説の巻頭に編まれた舟越節の「靈視の刻」がおもしろい。テレビ局のプロデューサーをしている男が、担当しているワイドショー番組で、靈視のできる男を生放送で取り上げる顛末を描く。なんとか視聴率を上げたいテレビ局の思惑と現代のブームである心霊現象などを上手にとらえ、ストーリー展開でひきつける。また八重瀬けい「茶毘」はペット霊園で火葬を担当する若い男の話で、自分の父母から愛情をかけられたことのない思いを捨て犬と重ね合わせて描く。小説としての枠組みはしっかりとできているが、生死の哲学的意味を盛り込み、比喻を書き込めば満点に近い。柴田康弘「冬の光」は牛乳配達をする専門学校生の「ぼく」が、浮浪者の男に牛乳を頼まれ配達していたがお金が回収できずに、「ぼく」は男に暴力をふるう。牛乳店の奥さんはキリスト教の信者で、教会と一緒に「ぼく」を連れていき神父の説教を聞かせる。「ぼく」は自分の過ちに気がつく、という話。人間にとつて後悔や誤りの自覚はどこからやってくるのか、「ぼく」の内面をさらに掘り下げてほしい。秀作にはまちがいない。

6号では川島英夫「仙造の結婚」、宮崎喜代美「石をうむ」、三東崇昇「やませみ」の三本の小説が秀逸。まず川島作品、火葬場で五十年も働き続けた仙造は七十五歳で突然二十一歳の若い嫁をもらう。しかしその生娘は聾啞者だった。その奇妙なカップルは仲睦まじく町の人たちも不思議に思う。今年八十歳になる仙造は若返ったようでもある。なぜ仙造は結婚したのか。それは身よりのない少女の遺体を供養して茶毘にふしたことから始まったのだった。お伽噺や説話こそが小説の起源である、と力を入れて言いたくなるような想像力溢れる作品。宮崎作品は、二十九歳の女性の「わたし」が語り手。「わたし」は窯元に嫁ぎ妊娠した。亭主は酒浸りで家になかなか帰ってこない。「わたし」は一回だけ義父と間違いを犯した。鬱屈のなかで私たちの日常に潜む「濃い影」とは何かを考えさせられる作品。三東作品は、妻にも死なれ定年を迎えた後病に倒れた元教師の主人公のもとへ、かつての教え子でいまは同じく教師をしている女性が看病に訪れる話。伏線に少年のころ経験した清流に住む鳥、やませみの死がある。人は生涯を閉じようとするとき、昔日の心の小さな傷をどのように考えて人生を終えるのだろうか。いずれの作も人生の深い意味を問う作品となっている。

同じ九州から「日田文學」57号も部厚く立派な内容、だが残念ながら本号で休刊とのこと。同人のその後の健闘を祈る。そのなかで相加八重「鈴石」が光っている。土俗的な民話風の展開で、三年前十六歳で家出したままの知的障害者の息子を心配する母の物語。鈴石とは、中が空洞でふると鈴のように音がする石のこと。題名の寓意は重い。文学とは何か、を私たちに示してくれている作品だ。

相加は「二十一せいき」11号にも「鳶師」を書いている。肉体労働者の汗のしずくが言葉となったようなすぐれた作品である。

「海」第二期創刊号では、北里美和子「うたかた」、有森信二「螺旋階段」が目立った。北里の作品は、定年に近い学校教師の兄が、弟の事業の保証人になり事業が破滅しその肩代わりをするために、夫婦の偽装離婚も視野に入れた覚悟を強いられる顛末を描く。努力して定年を迎えてまた降り出しに戻る「運」や人生のはかなさを淡々と書く。力のある作

者だ。またミステリー仕立ての有森の作品は市議会議員に当選した友人がその祝いの席の後、マンションの五階から転落し、一命をとりとめたものの事故か事件かを人間模様のなかに追っていく作品。読み応えがある。

ミステリーといえば「胡壺・KOKO」8号の納富泰子「パートタイム」も、社会経験のない家庭の主婦がある日パートに応募し採用され事務員として古美術商宅に勤める話。仕事は古いアパートの一室で事務用品もなく、かかってこない電話番号と留守番をしているだけなのだが、犯罪の臭いもして読ませる。謎の古美術商の男も設定としておもしろい。この作者は文学の本質である「弧」をわかっていると思つた。題名が平凡で一考の余地があるが、秀作であることは間違いない。

「構想」46号の藤田愛子「映画館」は、八十代の高齢の女性が二月の寒い日に東京六本木に出かけて映画三本を観る話。孤独のなかで凜として生に向かう姿が印象的。文学の根源がわかっている作者の作品だ。ただ映画評の部分は薄くしたほうがよいかもしくない。島山拓「幼心の記」は宮澤賢治をベースにした小説で着想はおもしろいが、リアリティが希薄だ。小説はリアリティがあればよいというものはないが、寓話やファンタスティックノベルにするならば構想力と物語力が問われる。力のある作者だけに今後をみたい。

「小説藝術」49号、竹森仁之介「鉄道工夫」はアメリカに渡つた「移民もの」で著者のライフワークである。

「米子文学」55号、佐藤多美子「バスを降りて」は戦後期を暮らす貧しい少女のやりきれない思いを描く。父が借金で姿を消し生活の能力のない母と二人の妹を抱えた主人公は、定時制高校を中退しながら働き家計を助ける。ある日、幼い女の子が交通事故に遭い現場を目撃した彼女は病院まで付き沿う。家族が仲のよい女の子の一家に自分の孤独な思いを託すのであつた。よくまとまつた作品である。

「北斗」5月★では尾関忠雄の戯曲「ベケットを待ちながら」に注目した。もちろん名作「ゴドーを待ちながら」がベースになっている。私たちは永遠にゴドーが来るのを待っているのである。その哲学的意味を作者は十分に理解した上で作品を再構築している。

「顔」67号山崎文男「とんび」はせつない話だ。信州から上京してきた男が五十年ぶりに中学時代の同級生と東京駅で偶然出会い飲食をするが、実は偽物でたんなる詐欺だった。しかし男は少年時代のスイカ泥棒、どんど焼き、喧嘩など懐かしい思い出に浸り、しばし夢のような回想をするのだった。男の原風景が見事に描かれている。

「まほろば」69号には河野アサが小説「まほろば」(二)を書いている。私は七月の作家の総会で河野のミニ講演を聞く機会に恵まれたが、その体験が彼女の文学の根幹にあると感じた。同誌は河野が発行人をつとめている。活動に敬意を表する。

「季刊遠近」37号では、ストーリーテリングがある作品が並ぶ。逆井三三「名無しの殺し屋」、柚かおり「イエローカード」、北村幹子「或るマッサージュ師の恋」。いずれの作品も話の展開がおもしろい。話がおもしろいことと小説の完成度、文学としてのクオリティとは別物であることを確認しながら今後に期待したいと思う。

その点同様のものが「彩雲」2号の馬込太郎「ふつか酔い」、職場のつきあいで酒を飲んでばかりいる男性社員の身に起こった出来事。理屈抜きにおもしろいが、前記のようにその出来事や事件を主人公がどのように考え、また他者への深い洞察力が描かれているのか。そのことはすべての同人誌作品に問われる。同誌の寺本親平「流説★解説」は幻想的な作

風で感心した。前記のストーリーテリングとは無縁の作品だが、幻想性や神話性の向こう側にある何か、哲学的な意味が問われる。

「河」150号では、難波田節子「夕映えとりんどう」、有料老人ホームに暮らす女性は七十四歳、夫の死後財産を売り払い、同じくホーム入居者の二つ年下の男と知り合う。老い、家族、ホームの人間関係など現代の課題をあぶりだしている。疎遠の長女宛の手紙に驚くようなことを書いてみよう、と、思案する場面などが小気味よい。

「じゅん文学」59号の丹羽加奈子「一枝の桜」は、九十歳になる里美が岡崎公園の桜がみたいといひだし娘と孫に連れて行ってもらいながら少女時代を回想する。一方孫娘は恋人との別れを重ね合わせている、という作品。その祖母と孫娘の重ね合わせ方がうまい。元千晶「嘔吐」はネグレクトにあう少女の悲しい話であるが「あたい」と一人称で書くその少女のその後の反転の物語を読みたいと思った。

悲しくせつない話といえば「月水金」³³号の河合火骨「真夜中の霊柩車に乗る幼女」。題名のとおり五歳になる娘を事故で亡くした男が、ある真夜中空中を走るバスに遭遇する。そこには死んだはずの娘が乗っていた。幼い子どもを喪った親の嘆きはいくばかりか、その哀切さがよく表現され、宮崎駿や松本零士の映画やアニメを観ているような感覚になる。

「詩と眞實」では720号と721号の教師ものに関心を持った。山口碧「田舎教師」

と宮川行志「冬の蜥蜴」^{とかけ}である。山口作品は一九六〇年代、三十代の男性教師が山奥の学校に転勤となり単身赴任となり家族の触れあいもないまま、三年が過ぎクラスの女生徒が孤児になってしまったことをきっかけに彼女を養女にする話。また宮川作品は、同じく一九六〇年代の男性教師が主人公。学校の図書館の書棚と壁の間に誤って五寸釘で打ちつけられた蜥蜴を発見。一年もそのまま生き延びた蜥蜴に病気の自分の娘を重ね合わせる。教師を主人公にした小説は同人誌のなかに散見されるが、テーマをしっかりと絞って書いてほしいと願う。前記二作品にはきらりと光るテーマがある。

教師ものといえば毎回教師の話を描くのが川島徹。今回は「文学街」263号に「残された時間」を発表している。校長を定年退職するまで一年をきった男が、元校長仲間のひとりが美人を連れて学校を訪ねてきて、健康食品の会社を立ち上げたと言う。男は美人のパートナーが羨ましくてしょうがない。彼女をさらって起業しようと思うが、どんでん返しが待っていた。人間の欲望をストレートにだして好感が持てる。「文学街」ではほかに261号の遠野美地子「神の回廊」、シルバー人材センターから高齢夫婦の妻の通院介助を頼まれた女性が主人公。主人公の目をおして老いや老老介護の問題をあぶりだしている。作者の人間観がよく表現されている。262号の森啓夫「玄界の女神」は戦後と朝鮮戦争の混乱時期に韓国から戦火をのがれて来た青年が日本で活動し、その娘が外国人登録の指紋押捺拒否の運動を展開する物語で力作。いまの若い読者にぜひ読んでもらいたい、作者渾身の一作である。

「文藝軌道」4月号、と「山形文学」97集、「内海文学」128号の「あとがき」が心に響いた。同人の高齢化や会員減少の実状を訴え、しかし書くことの大切さを訴える「山形文学」。そして中島敦「山月記」を引用しながら書く決意に思いを馳せる「文藝軌道」。

そのほか「風の森」9号、「文芸東北」、「海峡派」115号、「文芸誌〇(オー)」44号、「郡山文学」34号、「水戸評論」120号、それぞれの個性溢れる活動が目についた。

最後に「全作家」の前号74号、小笠原幹夫「演劇コンクール事件」はミステリアスな展開で江戸情緒と高校生という取り合わせがうまいが読み物の域をでない。文学として屹立するためには何が必要なのか、合評会などで意見を寄せていただきたい。

さてベスト5は相加八重「鈴石」、川島英夫「仙造の結婚」、宮崎喜代美「石をうむ」、藤田愛子「映画館」、納富泰子「パートタイム」。

私も時折、心が折れそうになることがある。好きなきに好きな本を読んで、気の合う仲間と文学談義で飲み明かしながら、晴耕雨読の生活ができたらなんとよいものか、と思うときもある。しかし前述の諸誌の「あとがき」を読んで勇気づけられた。終焉まで歩き続けるしかないのだ。

筆者プロフィール..

文芸評論家、放送作家、NHK学園自分史講座講師。現在時事通信、北海道新聞で書評を担当。テレビでは愛川欽也、武田鉄矢、中西哲生、香坂みゆきなどのレギュラー番組の企画・構成、台本制作を担当。人気番組「愛川欽也バックインジャーナル」ではコメンテーターとしてもレギュラー出演中。著書「村上春樹とドストエーフスキイ」「新宿小説論」ほか、共著「立松和平 ドロップアウト」「立松和平 文学の修羅として」ほか。